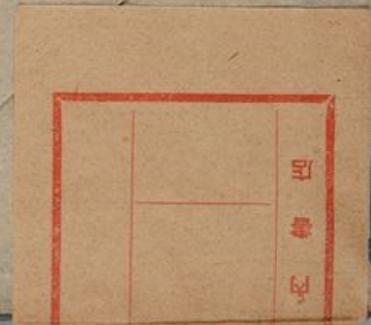


歌乃あり箇三十ひとて五句
あり上此三句とへ下二句をまと
りふもと／ふこ／うまりもともうち
よじみ／ふあう／とゆはくせときたまよ
そ哥も心ゆ／き／き／け／みてこく
ろよ／き／き／と／う／あ／と／く／れ／う／こ
う／あ／と／が／く／う／く／れ／て／や／と／み／あ／
き／し／う／き／か／い／と／す／ら／よ／す／く／う／つ／
く／い／え／あ／う／を／か／へ／ゆ／う／う／か／



らすハモクニリシムヘトアラハシラ
リハラシキヨリモアリてことき
えりハ先はくしくるがくにだる也
どもにえくありまほ右ノ人情くやす
まくらとよまとあよやくうとゆ
もれりをかん中こううちへりもあ
ねとくせにありふことといあも
うハナをまろき半よをもる貫く
ミハハ中こうれとよがり今れ人のみ
ひハラクさぬなスヘ

風ぬけハモクニリシムヘトアラハシラ
來するやあうひうニゆ
テハモクニリシムヘトアラハシラ
都波リハクレ行はまぬ
いまねりつまと何トエム
是ハ伊勢ニシテ勢名モハくよキヘ
ハラク

志ホニシムハサヘソキ
神モハシモ成ハキモ
モハハラクハシモハシモハシモハシモ

世ノ中をみにあん船ほゝす
うきゆく舟のりよりとて
あすかうすありまづいとてとて
みきれ山といとて月うそ
和田の山ねやうめけて漕出
今いはよう下れほゝ船
たとひれうそこと
ゆひの妹うりせりとてのせり
行をさじこらうり啼なり
よつやとの花うそてにくふ人を

うすあん後うぬうふをき
かうぬれくつまうはれう月と
とくもじうとすうううう年
うれうをよきうたうぬなえき
事を行まことれけよじねとくきよくね
たうろよだうこよのわるなりあく
うくがうくしとくふくのむへりく
らう

你山ふと松の高みよきえなぐ
みや二六生へゑううれはれう

あとほとみれと心おききとをなせり
へ

もかりるがいまうがきこよすき
みきハ乃の前志かくにきくあり
ひこりすれとむきはかとほり
みよしのいかとノガえ本野の
いわを高ハぬノハシニモアリ
もくきとれ牛のあらと見いそりして
りくらと

さ山ノハラレキシ外山ノ
ゆりきのうはくとほきよ
ふとゆふうじりとてとくとそく
ほけくよりか、りきゆみかりうの奇と
ゆふ去風うすまと二句よホシ
わふハセウ人よまめりのうのまよ
称とあとの兼ノホトウれ耳よそま
ておさきニシテ

ちとわきしのちハラクたなれ花を
ゆふすとほよてふれ

句を食ふと、色いろりんどうへとぞりて

きこゆるもむかう

句のほと壁のまへと小あきと色くせこす
えねやう

久きつづまに河ふ志

君わらうみもからうくよ

凡ぶらうい御くゆめりかひうわれと

葉なまきとくましひちうてちくはら

牛うふとあすハ後へてにから

だのをとあく祭なまはねすとまうぬ
あく人のうちかとくとくよあくまじぬ
むごゆふてもめほとくきくとくとく
てんこぢよへ古を幸えかとくめが
ううれひよへくはくとくとくめが
をえめりとくめりとく人のいぬかたと
葉ひよくがんわむじうれまのをこむ
て今の人あくよもれひうりうとやま
らめとあくでりもむれひうりうとやま
なむあくきうれひよく人かたとやま

まくもまくもくもくもくもくとね
ぬるに粗うきにくひぐへ
かく風とめくす奇三十八文字りくへ
風とかくこうこ形うけむじひゆとう向
みとちくね義よあうらむれ
うちくはくちくふまのまくせよ
うのうに白さくうい行た花うも
ひとくひとく

ふくふくふくかくひくこくうりそ
わくはくもあうきまくらんまくにえん

えうたまくう貫うかくうまくゆう
日午北

ふくふくうそ

みはくふくうそ

れらを

見

新撰體脳

公任卿撰

莫傳抄

加賀五原

正月一日大内駕の上に至る

人根と
ぬとまろ中少をもやきがひまやくあら潤よとがつ

初代五原

正月三日

今しはよか門ねぢり
もはらやまちむれ初代五原年ノアキテノ色え

初見五原

ねかり

やくとふみそりぬとくとくとくとくとくとくとく

子代五原

ね乃無名十九

祚山深城とおたかく伊人さうをとて西潤物を

子代五原

正月七日正氣とつを西潤すうかすも

根白茶 セリヤサ

寒山茶の緑茶を根白茶と呼ぶ事多
くあり

梅散思茶 梅乃花茶もあつて

山里茶野茶だけが茶の名前がある

羽深茶 楊芳茶小豆茶

その他の古茶や山茶等もあつて花茶等にまつり

麦茶アラモ オクモ茶

植茶くわんややか茶やまかと茶等の名合ふ

化名茶 同

ちひくさくら茶金魚茶松くさ茶はなとみ茶

お向茶 お茶とお茶の茶小豆茶

花茶茶葉茶茶葉茶お茶の茶一茶の茶茶葉茶茶葉茶

桑毛茶 松茶とけたり

お茶の茶お茶の茶お茶の茶お茶の茶お茶の茶

他夏花茶 花

お茶の茶お茶の茶お茶の茶お茶の茶お茶の茶

一茶茶 すみき

一茶茶お茶の茶お茶の茶お茶の茶お茶の茶

二茶茶 お茶の茶

此れら乃稀少なりみにあつて二葉草にむけりあり

一葉草 同

乃はやくの葉をすん葉を序や葉はすとてもく

二葉草 同

二葉草がむかへるを色一月はあれぞれ、ひり

三葉草 同

おもや名としよひのことまつはりえ葉をそひき

四葉草 同

ひとがや方へるを色二月は葉をいわむけまつり

五葉草 柳

ねあらとほれど風がまよはけあらりてれはる

川草 同

浪木草とす草下すくはゆきま風や波のう風よはる

・花見鳥 うきみど

まつらははたのひとては野草をあらむとて

六取草 浦

おもむかとておもむかとては葉をきくは

二季鳥 鳳

いのづかとておもむかとては葉をきくは

二季草 菓

まもあらわや風に二十七ねのとあかがれをうせ
ねのよ もう

そりやれわ春をすくねよはめしとくさり
ぬ酒古ま 三月前かたら酒入るや飲桃あつ
ひじくやまだと色むくみこまかすとひかゆりせ
西士るま

弓の弓と竹の弓弓代とも月やびくはたよあくと春
日新ま 五川を苗代といひ

そりやれわ天の川を水のま流れきぬれ
佐生ま 春を空せれどもまの地名から

まくはまくわらゆりや林野とも
ち生ま まき草とあくとくは春の地名から
ねがい葉も吹き下りあくとくま林とふのほふくみに
岩根ま そひ

そなへわあくらむくわやあくとおきくはまく

美部

初元ま 即花

そりやれわまくわに郭と立田はま里みちくひづ

雪元ま 同

だ家とまくわ神ゆき一雪とまくわ雪よゆてすまく

垣尼至 爭む

卷三

四三

アラ次モアマホトハシマニヤタシタスルニシと
形ニミ あら

唐よ和乃ニミテハ好キヤハタシテアヘム
中ヨリ行ひとれ方ニシテヨウカシラ崩
沖カカリ跡ヨ定ニ達アリヨヒドリ
ヨ向ヨガリテモハシマトヒト紀念堂トアス
ウタヒタリト花ノカタヒヤスミモハ行ハツシ
うみくさ

アラシヒ記念堂トナキ音大和歌ノ今

子ノ御クニニシハアリサレラシの段死ニ
親御ニヒトアシタモトセシトヨアシテ
アカリ入ガムシニシソニヒトシニ傳モシ
キムモハシタの念形ニマツクハシタ種ハシル

良去前 杜若

友ノ御クニニシハアリサレラシの段死ニ
石竹 もとから ま皇紀モ

アラシヒタモアシタの竹がモセタハシタモシ

雲尼至 あら

アラシヒタモアシタハシタモシテアシト言ふれ

庭古草 楷

色画一の病も首乃處をとてかたるといふのぢりと

妹待ま 玄因

あらわめ林すらまはまくへきう日あきまくわきあ

み鶴ま 麦田 稲

ちくじよ風雨下枯れ一のせまとからくやめ

池足ま そらば

おうか花やすじゆみまほかくともま葉うひの

露寒ま こうすの葉

かほりわやまんあなまなねまくらをくらむは

水嵩ま こうすの葉

花はあみやべてあひままを葉とうめまわあす

庭嵩水 五月あまの風をふりてかみか

青あやゆりをみるくらみわくとがときのタケ

玉器ま みくら

お半が半にむけしのむきにうちそりのひ

玉器ま ね

頬やまくらむけられまくわでこかくはまく

もまよま そ

疎波はやせつまかむじくまばゆりゆかくも

吹きまよ けやせん

かわちやかなれづめことよがほんとくをもせざん
えま 扱り

えの西風をまゆふありとまふらはくそくとこゝ那
大情ま 葉のあうつてかみどり

おとしの河蟹すみよもうとま月はうかがひたよ
夜木立る やこれ

西風さうさん月と夕くまに秋のまづく月もすくり
あくあま 牡丹

名くうはうもむきのまよみ花はまかじかみくほ

名取ま やん

粉本むかわくやまくま花とゆくとくとくとくとくとく
且見ま ゆく

みらみのまくまく里のりくらうくらうくらうくら
東白ま 大至 又牡丹とくとくとく
むくらむくらむくらむくらむくらむくらむくら
以あくま 大角豆
いあくまくらむくらむくらむくらむくらむくら

散い理ま 小角豆

禁風く風く風く風く風く風く風く風く風く風く

莫體

涼書よ 松風

すきみとせんじみふすめしとくとまくせ乃木と
と明よ 扇

よかとよかみがみよ成りと風のとくはとわとか
風移よ おわー

約もとせんじにかうらまゆのと神お月やとく風
風毛よ れわー

こくさとくみふるん風うよ夕かうやねやねを
秋部

初見よ 疾

きくあめあらわらかくいとよまくすのと氣とくに
庭元よ とく
頃移よとくわやかと庭や今早ゆ風よか人のおはなよ
林遼よ とくに
あまらまくわたけぶ此せんとすとめとくわゆに
濃深よ 疾

奉りくはまこととよまくひくはまくわよ
あ急よ とくに
わくのとくわくわとまかすとくと風やねりん

紅葉鳥 麻

西東を立田乃山に名付けしと申すゆゑ
ちきりゆうその山の花をまづみられたるがよほ

露岩マツイシ

お伊豆村山の山とて高麗より來る風のたれゆゑ
波若ハセガワ

八角中野山の山名あり

秀名ヒメノナミあはら山の山名あり

色玉カラタマ

松

木名山の山名あり高麗をもとと申す

ねえ草ネエグサ

木名山の山名あり高麗をもとと申す

旗室ハタヤマ山名あり

おはら山の山名あり

山名あり

木名山の山名あり

木名山の山名あり

火薙ヒヅケ山の山名あり

竹子チクシ山

春山ハナヤマ山名あり

おはら山の山名あり

木名山の山名あり

金波キンボ山の山名あり

木名山の山名あり

白雲ハクウン山の山名あり

木名山の山名あり

龍溪

卷

算

九

又は菊と門ひしと奥別よりふくの妻乃
跡よ生女ひかくをり又わらじくらきも
門はは賀源云始てあかく

卷之三

名のむすびをうながすとおはりへおまかせくして白がにふき
水穂木 みそく木

子也とあくまやわふ年数よふを重ねてよしむ
手向水 七月廿六日手向也

卷之三

竹乃翁

妹の家に来られた事の間まことには女房
久玉雅

月夜の東風が吹くと心が和むたゞ草
次浪葉 尾花

あはか ウタヒトト後を以て あらかまひわ木まを

初見

卷之三

時々の通事はさう多くて甚だ忙うりあやとへる事

おひるま 不れ

ひそ代色一ねの本そのおみまゝくもむかしの筆をすみハ
舌元ま 同

御めふぬぬりの雪ふま様ふゆりもたやせり
秋をま 冬まノ也名あり
花くあら葉くろとけ枯がまがみふとけふと約の白雲が
初をま お梅 少節よを
希はしけかたよどりをまもゆまてやをとぞうし
境足ま おのと萍と云たり
波太へ行ふらぬ一境とまゆはられちのれの君

水毛漫

月の新水のあゆきゆゑてあれあれ
うちが荒川よあ細もとゆすり
立章第一みづかの拂は風よむをゆくわゆく
親みま 壱葉 えちまとよ
やくあらはせかだよまよまよたにだやさくし
六花 雪
を風のぬくともうじあむのう神もあれゝま

雜部

おひるま 松

ひすく立津が風のこゑを風を吹かすと立津

そよ代ま ね

袖やああんの袖をそよよよ冬の立津が風のこゑ

延代ま たれー

名よわく代とあくまうとうかくむは

延代ま 同

立津が風やああんの立津が風やああんの立津が風

え代ま 心

自然と風と風とけんかともすくともせき

立津が風やああんの立津が風やああんの立津が風

え代ま 心

立津が風やああんの立津が風やああんの立津が風

え代ま 心

立津が風やああんの立津が風やああんの立津が風

え代ま ああ

立津が風やああんの立津が風やああんの立津が風

え代ま ああ

立津が風やああんの立津が風やああんの立津が風

え代ま うろ

立津が風やああんの立津が風やああんの立津が風

日是ま 心

山里は晴てのねづかやりと内へうきの経とくらす

寝是ま 公

あふすゑ稚はがんむはまゆのかは草と梅と

高ま ちよ呂

かみがくす歌とわんむをはくは神の湯なりすと
同とくさ うの

月かくみ経ひ水のまほくとれかふくわらわせハ

十二月異名

吉新月 正月

冬経月をせかくはんじのま風ふるく年はあそび

年初月 同

梅もくや藍よからぬうし月名をはくく成ふくしれ

雪消月 梅津月 二月

年あるまくもくみは風士の林れ帝をく月は時をすく
大元のとくちよひ梅津月のくにゆきをくせくわくする

花津月 夏見月 三月

あは風く風く乃名種わくじむれく秋も神なむく
種あむのむれの暮と月風乃花くゆよまくまくと

卯花月 宵初月 五月

真傳

卷之三

文慶もくらへるを心地むかへて行ひつゝ内
郭公おはすまめの月も秋の山のあらうい
校雲月 五月多五月一月因ふむ二月かと
肩あはれもと風きづきと月の草むらほ

校雲月

涼書月

松風月齋

風吹く波ありかなれども月の波よとあ
雲ありみるすと葉を下り松を月乃木とやれ

七
右
月

卷之二

卷之四

卷之三

松の木の名前をもと本塗月あやむけともうつされ
てお花はすくとももとまねく御月からあるものあり

吉野山中宿の御内閣にて月日をとて又此處
御去月十月

虫やまゆねを葉も根も力によへ種を貯とひ取つてぬ
能育めりこゝでくらうにかのむつてのつての

雪待月

祐之月十一日

見雪多月とひるゆきはすくすくのすり
四方にすれぬる詠爲のうみ月天の星乃今やうさん
若月 十二月

觀月 十二月

あらたますやまん御使とまの月ひよをすり
翁のまほまほむわ月ねやかうのなうあらん

慶安元年六月書之

萬葉集草本并十二月吳名集莫傳抄

和歌筋要

支和歌を神代よりノアキリムニシテ
ヤサカレハツヒノクシカシキヘタリハ、キノ
アヒタ、凡情もカシモカシルセア人マム、
アヒタ、タモソウアヒタキアヒタモシタ
ミシカ面ノアカシカシヒヌ、タラヒヒタセ
シモカレ、アヒタ、カシヒヌ、タラヒヒタセ
カシル、アヒタ、カシル、アヒタ、カシル、
アヒタ、アヒタ、アヒタ、アヒタ、アヒタ、アヒタ

物より見ゆる事はあつてよ
きなり在りてと申すうふせり
うかくもみすうゆへばあらひにき
僧俗の旅をむねこすせとあらきとみて
うへことをありあんせくあうとみて、と云
やうにもじてゆりすれむねにすまわる
まえしれどどく

まの間まどりぬまねふが水うちにはぐる
まう田とんがまく入とえしとあて水^ノまく
まくまくがれもやさしむとわくらふられ

まくまくしれまくもくとまくまくまくまく
まくまく初め立せつりまくもくとまく
まくまく次れふせふれらじとまくとまく
だらけせくにまくあむけにすまくまくまく
せく所まくえしれまくせくまくまくまく
まくまく腰まくし定まくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまく

とものえんじあはつをひかせり此處とへ
われは旅とまほめのうへあきらめよめかくす
かたもへぬうゆひふんなりやうへゆく
えんじやれむあれつまほへゆくてくわ
ちやくうゆじ放寔よに題うつすをきしとい
うにまくらく胸腰すくにまくらしことを
やして中とまよととをもせとまほくく
毎とえ資のと角くまくらあり中よりとぬ
るゝ事もありすとうちとぬるくすい方し
はな
もくらくのうえうへくもくらじとせんハ欲

サレヌニ所みきれ字ぢくしの腰一弓
もくじというてまほ延和やかく行
せうの身へまくらすにうじ下まくらの腰
うきしのまくでしゆとせよきれあう
腰折あく板とあくさういのき一様もく
もくらくやれ疾席をもまくら行もく
もくらおもむきりもくつれのうの對うじゆ
て腰とゆくとく反席もくくうの對うじゆ
もくらうともくらうてたましのれの腰折もく
もくらうくすれうきとおもむり或美

本よりたてと腰折よりひきぬきをうながす
せれどとつねりありあれの行の波あり腰よ
まよへあくへくいは歌すそれたとやうりふ
をおもひりとくひそりとおれどもくもく
なり此外行の波あくへくひまゆりす
あくへくあれり

長短短歌旋頭混本回文隱題是あり

一七三十一字のすなり短すはるる
ノ句あくへくひそり旋頭とよひ三十一
字れすのふ文字とくも七文字とくも一句

あくへくとくひそり回文ハ三十一字れすとく
あくへくじもあくへくひそりとくひそり
あくへくひとくひそりは歌ハむひとよつよ
半と後うぐれあり

一三十一字のすを初ふ文字によみとくひ
とくひと終のせくふよれすとくひを音歌とくひと
はくひとくひとくひとくひとくひとくひとくひとく
あくへくひとくひとくひとくひとくひとくひとく
ひとくひとくひとくひとくひとくひとくひとく
あくへくひとくひとくひとくひとくひとくひとく

まことにふりうれまつりとくとくの處
されられへりそぞせんゆゆくゆくよ短す
きよも季減よ定たつて長歎短歎よよ
そは長すとくちぢみとくじ短すといふ
ケーラル混本とくもとく人氣とく義とくも
とく經すとくわくとく物

旋頭證奇云

かくに葉局たゞあぢうむりのとよ

後漢書

事に之をうながすの意を向ひておはせば、其の

志の義小ちよし化くすれ

混本證奇

あくまでもおまかせすぢやからだのうまい

國文紀序

此卷之序文，乃其子孫所傳，非其真跡。

卷之八

それより你のあたしのところのこれのうちむう
ときからじとくへまみれもくそりまちー

源題詠歌云 ひちひき

とくさり

わくしもあすかと年を失花とぞれ日ちりさとお

はくすむき

此外サモ匂れテヤソシのうり俳偕とソシモリ
一省冠の折句とソリ五七五七とれさうもまかせよ
トモハヨウリ

一冠やソハ五七五七々の次ナキナリトソミ
一俳偕とソハ俳歌也

一省冠れ折句の俳守アリセマシムの
あく抜とソリハモリセシモソリモソリモソリ

きれとうさー

冠の證寄カタシメと

あくの葉も

ミヌハモリと

きのまゆ

まゆハモリ

つくぢれやや

一俳偕證寄

秋の歌てひまづたを防せ郎たあかくへーとお

とよよ

にと鳥ハシタムレルノトモニヤシラムコトモ
あきくとよ

又或本云

ふくらむくすれぬの乃モヤシテムコトモ
アヌアリ
ムツノキ一ちりんふ當セアドシモ(キテ)ハ
チナリ、レアマノ病八れやまいあくべー

一四病とハ

岸樹 風燈 浪船 落花

暮柳 初一二一同

風地

月句二四尺

宿松

五言第4又7言六七月

落杞

毎句月

一八病者

内心 亂思 翳殊 滯鶴 花枝 老楓 中銚

は悔

一 内心文字ハガモリてんハシタム
一乱心老葉十一初一字第4又一字用

シテシテ月ノソ行スモシテシ月ミモシテ

一 翳殊初五終十字第5句終一字用

稿ち原本れ下れひましらてすにあまくとるそり矣

一諸稿 第二句於六十字終七十字月

ほぐやふ吹きよもじらがじゆくとくに本
一花板 あくらむけい前うれきをゑりかくとく
キモアリ正くましまのとくみくわぢりく
のとくむすてハシルタニキトモムニ

ツトモ

一堯祖去 サムカクモヤサナセモシ

キムカクモ

一中純去 五文字と六文字によるか 七文字附

八文字小よみぢとづれ見
一後悔去 緒とよみくさう文字所よじく
後悔とゆき

此書和歌貯心也 纲箱底漬不可圖
之非器量之仁者莫免他見紹亦難
為器量年齡之多少可授之更可
出國之外而已

建保二年三月日

致林末學法士 在劉

永仁四年十一月廿四日當家相付
秘書淑淮不可授以斗菽之次面謁
之刻審道事怠於之由懇望之間書
與良渝爭勢々勿許外見穴贊云

理達判

